

はじめに——書誌学の目的と対象

書誌学しよしがくとは耳慣れないことばでしょう。書物そのものを対象とする学問として、その目的をしっかりと認識した上で実践に取りかかって下さい。

一、書物の発生と自立

人間が一生のあいだに見聞きしたり考えたりしたことは、その一部は頭の中に記憶として残っていきませんが、その人が死ぬと消えてしまい、永遠に失われます。

もし生前に他の人に話していれば、伝えられた人の記憶として残りますが、そのわずかな可能性も、伝えられた人の死によって途絶えてしまいます。しかし文字のない時代にはそれが唯一、人間の知識や知恵を伝える手段でした。特に大勢の人にとって重要な内容は、神話や伝説の形をとって語り伝えられました。

これを文字にして書き残せば、口伝で伝えるよりも確実に、その人が死んだ後まで伝わります。さらにそれを書き写すことによって、より多くの人にも伝わることとなります。話すだけの時代よりずっと伝わりやすいのです。

ここに、複製され、時間・空間を越えて広がっていく、という書物の大きな特徴があります。

しかし、現代のわれわれにも経験があることですが、メモ用紙のようなものを書いておいても、どこかに

紛れ込んでしまったり、間違えて捨ててしまったりして、いつの間にか無くなります。また、内容を順序立てて整理しておかないと、後で読んだとき、自分でもどういものかわからなくなったりもします。これは使い捨てではなく、保存しておくべきものなのだ、ということ、視覚的にも、実質的にも明確にしておく必要があるのです。すなわち、何らかの形でひとまとまりにして表紙を付ける、という作業によって、情報を保存する入れ物としての書物が成り立ちます。

ひとたび書物という入れ物（形式）が成り立つと、何かを記録することだけではなく、今までこの世に存在しなかったテキスト、例えば文学作品、哲学的思索といったものが書物を作ることを目的に書かれるようになります。いわば人間の想像力や思考をふくらませる場として書物が機能するようになるのです。

二、書物の二面性

一般に、文化財あるいは視覚的な芸術作品（絵画・彫刻）は、オリジナルなものに唯一絶対の価値があり、複製品はその価値には及びません。しかし書物は、たとえば現代作家の小説ならば、書店に並ぶ何万冊という書物がどれも等しい価値を持っています。これは、内容（テキスト）が同一であるからです。

しかし、同じ内容でも価値（この場合は値段のこととおきます）が異なる場合があります。例えば、単行本と文庫本、特製本（豪華限定版）と普通本、といった場合です。

書物は、モノとしての形や大きさ、紙などの材料といった物質と、そこに記されている内容（テキスト）という文字情報のふたつから成り立っています。同一の情報を伝えることができれば、どのような形態をしていても、どんな紙を使っても、テキストの価値は変わりません。しかし、書物の価値は、それだけではなく、物質的側面に左右されるのです。単純に製作コストの違いだけではなく、読者の側がどのような形態を望んでいるか、ということでも変わってきます。

作る側からは、内容に応じた形態を考えるでしょう。しかし、文庫本のように、一定の形態の中にさまざまな書物押し込めるようなこともあるでしょう。決して内容が主、形態が従、ということばかりではありません。

書物を見る、研究する、というときには、常にこの二面性を意識する必要があります。

三、読まれる書物・読まれない書物

引き続き現代作家の小説を例に挙げると、同じ書物なのに、新刊書店と古書店とでは値段が違います。通常は古書店で売られるものは、汚れや傷、書き込みがあったりして、新刊本より状態がよくないため、値段が下がっていますが、逆に著者のサインが入っていたりすると、新刊本より高い場合もあります。これらは、その書物が出版後に受けた変化が、価値に影響を及ぼしているためです。

さきほど、書物の特徴として、複製されるということを挙げましたが、世の中にはただ一冊だけ、オリジナルだけの書物も存在します。芸道や武道などの秘伝書、親から子へ、師匠から弟子へと伝えられる職業上の秘密を書いた書物、誰にも見せない日記帳、などです。これらは、存在すること、所有すること、一冊しかないこと、特定の人間以外には読まれないこと、に価値があるもので、情報を広く伝えるという目的で作られてはいません。

このように、読む、あるいは所有する、といった享受の側面から書物を見ることも、その書物の性格を知

るために重要な視点なのです。

四、書誌学の目的

以上述べてきたように、書物にはモノとしての側面と情報としての側面があること、制作の過程のみならず、その後どのように読まれてきたか、という享受の側面も重要であること、がおわかり頂けたと思います。

書誌学は書物について記述することを目的としています。その記述の対象とは、主としてモノとしての側面です。内容については、文学作品であれば文学研究の立場から、歴史書であれば歴史学の立場から精密な検討が加えられていくはずですが、しかし、ある程度は形態とも関わって、内容の理解や検討を必要とするところがあります。

制作と享受の過程を考えるときにも、内容の理解は欠かせません。

また、一点一点の書物の検討、同一テキストを持つ複数の書物の比較検討、といったミクロの調査とは別に、享受の過程を大きく捉え、ある蔵書家や所蔵機関の蔵書の特徴、あるいは書物の流通や制作をマクロの視点から考えることも、書誌学の範囲にはいるでしょう。

このように、対象に応じて研究の方法や内容がさまざまに変化するのですが、いずれも書物という、人間の文化的な活動において重要な位置を占めるものを総体的に捉えること、すなわち、その書物の成立と伝来を跡づけて、人間の歴史という時間と空間の中に位置づけること、が目的です。

そして、最終的には、他の人文科学の分野と同様に、過去の人間がどのように生きてきたか、何を考えしてきたか、ということを知り、それによって現在及び未来の人間がよりよい社会を作るためのヒントを得たいと思っています。

五、本書において対象とする書物

本書では、日本の**古典籍**（和**本**）、すなわち江戸時代までに日本で作られた和綴じの書物をまずは中心の対象とします。念のために言っておけば、**古典**とは概念が異なります。同じ『源氏物語』でも、一五〇年前に出版されたものは対象になりますが、今年出版されたもの（洋装本）は対象になりません。

内容（テキスト）が日本人の著作であるかどうかは問いません。日本には、中国・朝鮮において著された書物を日本で書写・刊行したものが多数残っています。これらを排除して、日本人の著作に限定してしまつては、古典籍の十分な理解はできません。

また、次の二つの点で、範囲を拡張する必要があります。

一つは明治期成立の書物です。洋装・活版という近代の形態に切り替わる過程で、江戸時代の書物の形態を受け継いでいるものが、明治二〇年代まではかなり出版されています。これらも必要に応じて対象とすべきでしょう。

もう一つは、江戸時代までに中国・朝鮮から輸入された書物（唐本・朝鮮本）です。享受の側面から見れば、これらも日本古籍同様に読まれてきたもので、何ら排除する理由はありません。それどころか、日本の書物を理解する上で重要なヒントを与えてくれるでしょう。

したがって、もう一度まとめると、

- ・江戸時代までに日本で作られた書物
- ・江戸時代までに日本に存在していた書物
- ・それらの影響下で明治中期頃までに日本で作られた書物を対象とすることとします。

「本書で用いる用語について」

書誌学の専門用語についてはそのつど説明しますが、頻繁に使われるものはここにまとめておきます。

*書物：形態面と内容面を合わせて指し示す場合に用います。形態のみを指す場合は「モノとしての」「形態としての」といった形容を付します。

*テキスト：書物に記されている文字・絵画などの情報。「本文」ということばは、例えば本文と注、本文と前付・後付、といった具合に用います。

*和本・唐本・朝鮮本：モノとしての書物がどこで作られたか、という点に注目した呼び名です。

*和書・漢籍：テキストがどこで作られたか、という点に注目した呼び名です。日本であれば和書、中国であれば漢籍と呼びます。なお、日本で刊行された漢籍を特に和刻本と呼びます。

*版本・写本：テキストが印刷されている書物を版本（刊本）、手書きで記されている本を写本と呼びます。木版を整版とも呼びます。活字や拓本（文字部分を彫った板や石に濡れた紙を密着させ、上から墨を付けて文字部分を白ヌキにする方法。正面摺ともいう）による印刷も版本に含みます。なお、「版」は「板」と書くこともあります。

*丁（丁数）：張（張数）とも書きます。日本の古典籍で冊子体のものは、一枚の紙の表裏を合わせて1丁と数えます。2ページ＝1丁です。各ページを区別するときは表・裏を用います。第1ページは第1丁表（略して1オ）、第2ページは第1丁裏（1ウ）と表記します。

*版式・写式：版本・写本において、本文をどのようにレイアウトしているか、どのような文字を用いているか、といった形式のことを指します。

*版下：版木を彫るとき、薄い紙に書かれた原稿を裏返しに版木に彫りつけて、その墨の部分を残すように彫っていきまます。この紙（原稿）を版下と呼びます。

*書体・字体・字様：楷・行・草といった区別を書体、同じ文字で正字・異体字などの区別を字体、同じ書体・字体の中での明朝・ゴシックなどの違いを字様と呼びます。なお、ワープロソフトで使うフォントという語には書体・字様の両方が含まれていますので、本書では用いませぬ。

*伝本：同一と見なされるテキストが記されている書物の総体。「○○」という物語の伝本は現在約三〇本が知られている」といった具合に用います。

*時代区分：通常の歴史区分に従いますが、安土桃山時代を室町末期とも呼び、江戸時代（近世）のうち、慶長〜寛永（一六四三まで）を初期、正保〜元禄（一七〇三まで）を前期、宝永〜天明（一七八八まで）を中期、寛政〜天保（一八四三まで）を後期、弘化〜慶応を末期（幕末）とします。

7 本文(1)——版式・写式

本文をどのように紙の上に配置するか、さまざまな工夫がなされてきました。それを正確に記述することにより、その書物の性格や他の伝本との関係を探る手がかりになります。

一、全体的な注意事項

複数巻ある書物の場合、記述項目④⑤の繰り返しとなりますが、効率よく記述するためには、巻一を記述した上で、巻二以降は巻一と異なる点のみを書き加えていくのがよいでしょう。巻首・巻尾・版心については、巻次のみの変化であれば記述を省略してかまいません。

二、巻首・巻尾

本文の冒頭部分には、書名・巻次のほか、編著者名・校訂者名などが記されることがあります。漢籍系統の書物に多く見られます。書誌カードに編著者名を記すとき、重要な根拠となる部分ですので、これも含めて正確に写し取ります。

これらは、内容だけではなく、配置も重要な要素です。図43を例に、記述方法について述べます。

① 改行や字下げ、単語間の空きなどもそのまま写し取る場合。

「東野遺稿卷上

那須 安藤煥圖東壁 著
 東都 石川之清叔潭
 友人 南紀 山井重鼎君彛 輯
 武州 根本遜志伯脩

② 「」(改行マーク)や「」(括弧を示すカッコ。住吉朋彦氏考案)「低一格」(二字下げ)「隔三格」(三字空き)「□」(二字空き)といった説明をはさんで記述していく場合。

「東野遺稿卷上」(低八格) 那須□安藤煥圖東壁□著／(低五格) 友人□「東都□石川之清叔潭／南紀□山井重鼎君彛□輯／武州□根本遜志伯脩」□輯」

という具合です。カードのスペース節約には②の方がよいでしょう。



図43 巻首部分

続いて本文の冒頭部分も、一行ぐらい写しておきます。和書において内題のないものや、同名異書が多いものだと、本文冒頭によってその書物の同定が可能になる場合があります。また、詩文集や歌集など、小さな作品を集めているような書物の場合、本文の内部に、さらに部門—題—作品というような構造があるので、例えば

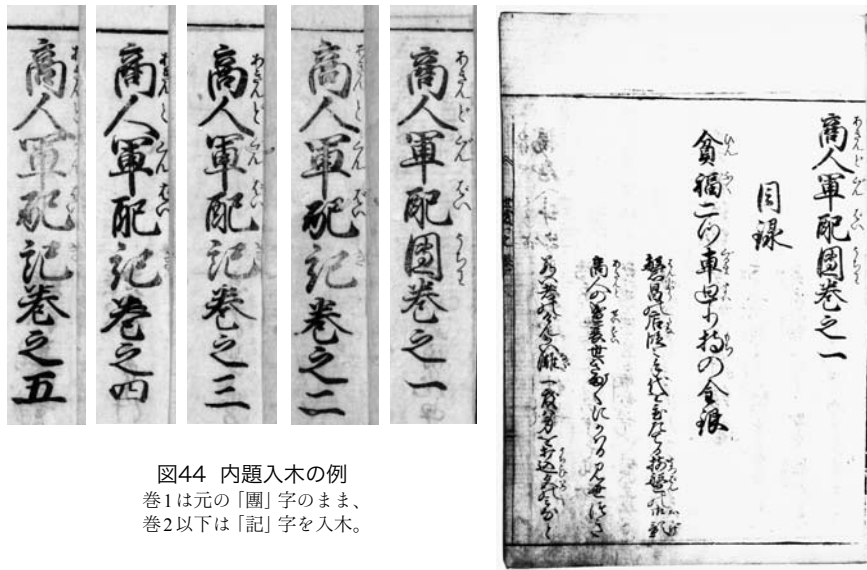


図44 内題入木の例
 卷1は元の「團」字のまま、
 卷2以下は「記」字を入木。

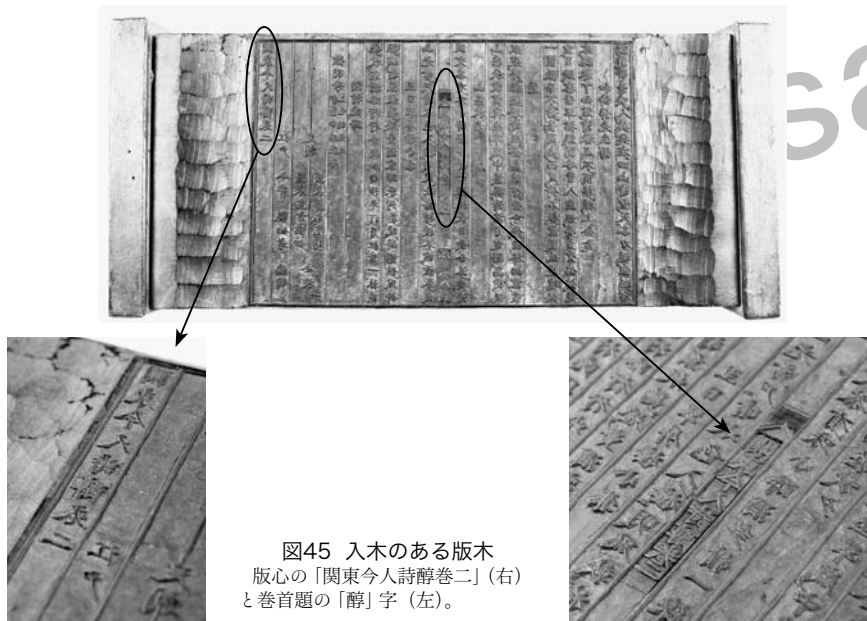


図45 入木のある版木
 版心の「関東今人詩醇卷二」(右)
 と巻首題の「醇」字(左)。

「□樂府／(低三格)紫騮馬歌三首／出入^ス戚里中。∴／(低二格)其二∴∴∴」というように、その配置もわかるように書いておくといいでしよう。

巻尾は巻尾題があればそれを写し取るだけでよいのですが、版本で、元にした写本の奥書(第9章参照)がそのまま載っているような場合は大事な情報として記録します。

江戸時代、出版者が変わって再発売された書物には、新刊に見せかけるために書名を変えてしまうものがあります。その場合、巻首や版心などの書名は入木(埋木^{うめき})も。版木を部分的に彫り変えること)によって変更されるので、周辺の文字と、大きさや字様に違いが出たり、墨付き(黒の濃淡)が違ったりします。この入木は版本ではどの部分でも起こりますが、特に巻首と刊記(第9章参照)に多いので注意しましょう。

三、版式

* 匡郭と版心

和文の写本を模倣したものを除き、ほとんどの版本には匡郭^{きやうかく}とよばれる枠があり、本文はその中に整然と並んでいます。行ごとに区切りの線(界線^{かいせん})があるものもあります。枠には全て一本線のもの、全て二本線のもの、縦のみ二本線のものがあり、それぞれ四周単辺・四周双辺・左右双辺と呼びます(匡郭のないものは無辺^{むへん})。界線の有無は有界・無界^{むかい}といいますが、もともと折本用の版木を用いて冊子本にしたもので、左右の匡郭がないものは「上下単辺・左右無辺」などと表記します。

なお、上部を区切って頭注などを入れてある場合があります。この部分を齧頭^{くわうとう}(首書・頭書とも)、あるいは上層(本文部分を下層)と呼んでもいいでしょう。匡郭の大きさは本文第1丁表部分、つまり半丁分を

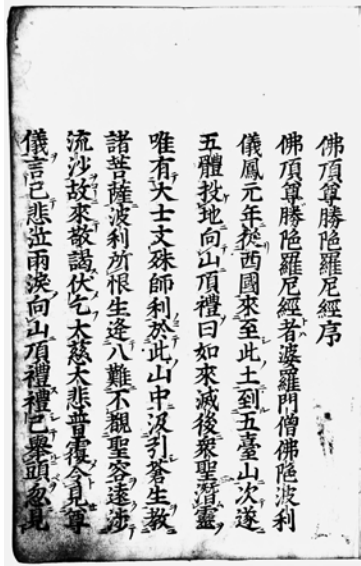


図47 無辺

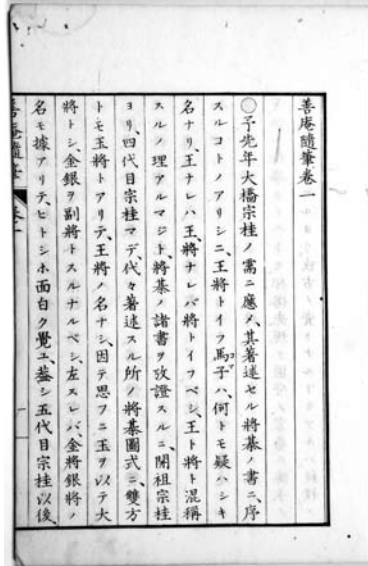


図46 左右双辺・有界

内法(線と線との内側)で計ります。左右の匡郭がない場合は縦のみで結構です。無辺の場合は、巻首題・編著者名等を除いた本文冒頭第一行の高さを計ります。これを字高(字面高さ)といいます。袋綴の折り目部分を版心または柱と呼びます。一丁分を広げたときの中央部分に当たるものです。ここには書名・巻次・丁付(第何丁であるかという表示)のほか、蔵版者名・刻工名(版木を彫った人の名。和本では稀)などが記されることがあります。

また、三角形を二つ向かい合わせたようなマークがあることが多く、これを魚尾といいます。もともとは製本するとき、紙を折る目安にしたものでしょう。黒魚尾・花口魚尾(花びらのような白抜き模様があるもの)・白魚尾(輪郭のみのもの)などと呼び分けます。魚尾の数(上のみ一つ:単魚尾、上下に一つずつ:双魚尾)と方向(下向、内向)もさまざまです。また、魚尾の外側(上下匡郭と魚尾の間。象鼻と呼びます。これに対して中央部分は中縫)に黒い線が入っているものもあり、太さに応じて大黒口(寛黒口)・中黒口・小黒口と呼び分けます(線のないものは白口)。

江戸初期・前期の版本では、丁によって匡郭や版心の形式が変化するものがあります。一々記述するのは大変煩雑ですが、伝本間で版の種類を比較する場合には必要なデータですので、その場合には詳しく書きます。通常は最も多い形式で代表させ、他に〇〇もある、といった表現でいいでしょう。

草双紙などのように、もともと内題がなく、もし外題が失われてしまうと、版心題が書名特定の唯一の手掛かりとなる版本もあるので気を付けましょう。

古活字版(第18章参照)では、すべての丁が同一の版心を用いているか、または複数の版心が一定のパターンで繰り返し現れることがあります。版心の種類は活字を組むための盤(植字盤)の数を示すのです。

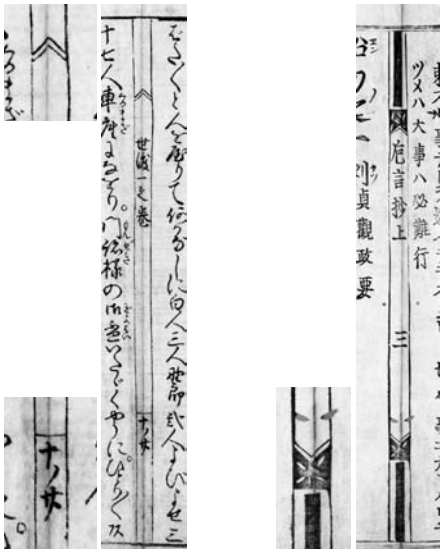


図49 中黒口・花口魚尾



図48 龍頭

図50 白魚尾・飛び丁「十ノ廿(二十)」とある。

*丁付と丁数

前付から本文へと移るとき、丁付を改めて一から始めるか、前付から通して付けているか、注意します。そして、丁付と丁数が一致するかどうかを一丁ずつ確かめていきます。

書物によって、実際より多く見せかけるためか、飛び丁(途中で「十一之十四」というように飛ばしてしまったり)があったり、逆にあとから挿絵などを増補したなどの理由で、又丁(十)「又十」「又十一」といった類があつたりすることもあります。これらは版本の成立や改訂の手掛かりになることもあるので、全て記述しましょう。なお、版心部分に何も印刷されていない版本には、丁付がノド(綴じ目の近く)あるいは綴じ目の中に隠れていることがありますので、版面全体をよく見てください。

もちろん、製本時あるいは修復時のミスによる乱丁(錯簡ともいいます)・落丁・衍丁(丁の重複)もあります。丁付が乱れている場合、何が原因か、内容との関係から考えていきます。

なお、江戸後期になってくると、版心に記載される文字を、折り目にかからないよう右半分(稀に左半分)に寄せて小さく印刷しているものが見られます(図48参照)。製本後に文字全体が見えるようにという配慮でしょう。近代以降の書物の「柱」や「ノンブル」に形態的には近づいているのです。

このようにして、丁付を参照しながら各巻冊の丁数を数えていきます。四巻四冊ならば、第一冊の丁数は前付十巻一、第二冊・第三冊はそれぞれ巻二・三と一致、第四冊は巻四十後付、となるでしょう(巻ごとに目録が付いている場合はそれも合計する必要があります)。また、一冊に複数巻ある場合はその合計が必要です。記述としては連続している部分は「〜」で省略して、例えば次のように表記します。

巻一：「一(〜)四、五之十、十一(〜)十五終」 10丁

巻二：「一(〜)五、又五、六(〜)十一終」 12丁

巻三：「二(〜)十二終」 11丁(第一丁落丁)

巻四：「一(〜)五、五、六(〜)十二終」 13丁(第五丁重複) 計46丁

*本文の形態(文体・用字については次章も参照)

漢文：半丁(半葉あるいは一面とも言う)行数・一行字数、および返点・送仮名・堅点(文字の音訓の区別や熟語であることを示す短い線)・句点(現代と異なり、句点・読点の使い分けはないことがほとんどです)・批点(強調したい部分や優れている部分の文字の脇に付ける点や丸)の有無。注が挿入されている場合はその形態を「注小字双行」「注小字単行」などと記します。

和文：かなかカナか、行数・字数(何行か数えてみて平均を取り、「〇〇字前後」とします)、および句点・振仮名・濁点の有無を記します。かな交じり文の場合、写本の模倣から始まっているので、一行の字数は一定せず、文字の大きさもばらつきが多いのが普通ですが、江戸時代後期、特に国学関係の書物では、連綿(文字をつなげて記すこと)せず、ひらがなも漢字もほぼ同じ大きさに揃えて、字数が一定してきます。この場合は「〇字」とします。これも近代の書物への接近・連続を示す現象と言えるでしょう。

なお、和文の場合、第一丁のみ行数・字数が異なる(少ない)場合があります。念のため、他の丁も数えてみて下さい。

書体・字様については前付・後付と同様です。

絵が主体で、文字はその周辺に配置されているもの(絵本・草双紙など)の場合は、大まかな行数と用字

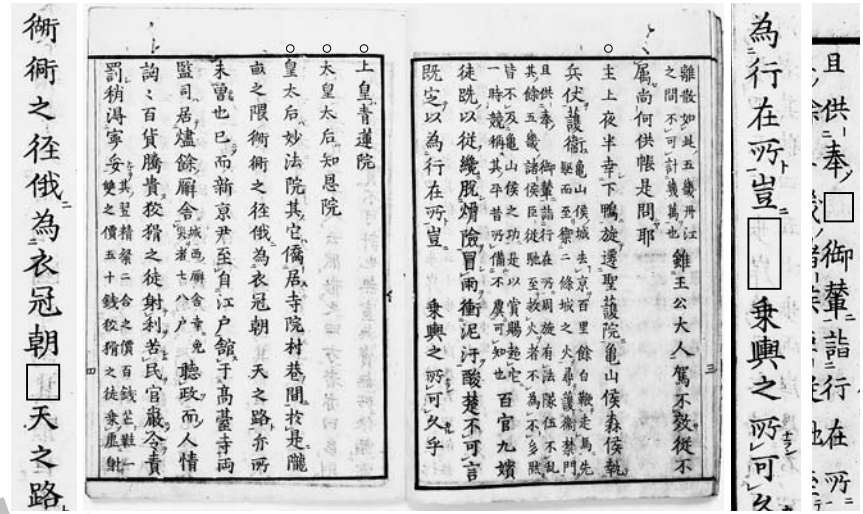


図51 平出(「主上」「上皇」「皇太后」「皇太后」、上欄に○で示した) 欠字(「御輦」「乘輿」「天」、拡大写真に□で示した)

のみでかまいません。

なお、天皇・将軍や直接の主君、父母などへの敬意を表すため、その人を指し示す語の前を一字から三字程度空ける(欠字)、改行して行頭に持つてくる(平出)、改行して他の行より一字から三字程度高くなる(台頭)、といった方法があります。これは前付にも見られることですが、あれば記述しましょう。

本版目の状態

版面については、状態をよく観察することが必要です。

文字・匡郭等の磨滅や欠けがないか、版木のひび割れで版面に亀裂が入ったりしていないか、入木や一丁全体の改刻がないか、といった、刊行当初の姿からの変化が版面に現れているかどうかは、その書の印刷時期の推定や、他の伝本との比較をする上で重要な情報となります。きれいな状態で印刷されているものは初印・早印、傷んだ状態のものは後印

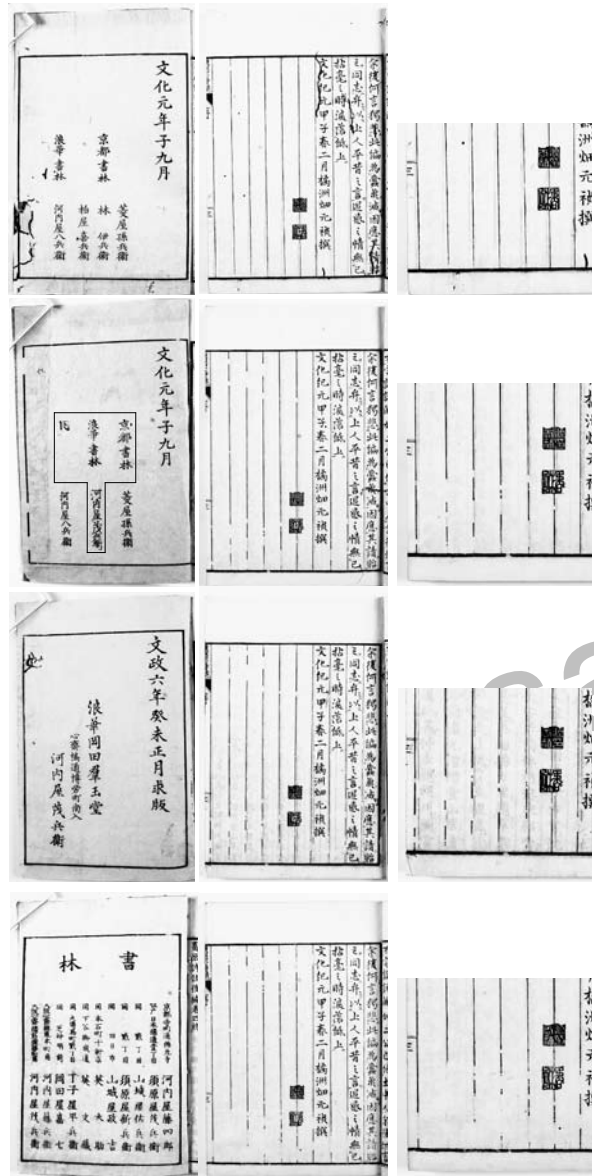


図52~55 早印・後印の例(界線の欠損が増えてくる)

図52 文化元年刊、早印
江戸での売出し記録が「割印帳」(第21章参照)にあり、それによると主版元は柏原喜兵衛。

図53 同、(文政六年以前)印
河内屋茂兵衛が版権の多くを買い取り主版元となったため、林伊兵衛・柏原喜兵衛の二軒が削除され、入木によって名前が加わった。

図54 同、文政六年印
河内屋茂兵衛がすべての版権を取得して、刊記を全面的に改めた。なお、「大坂本屋仲間記録」(第11章参照)所収「板木録」(第11章参照)によると、文化八年の時点では「河八(河内屋兵衛)京(菱屋孫兵衛)河茂(河内屋茂兵衛)河源(河内屋源七郎)」の四軒の相合版だったことがわかる。

図55 同、(文政六年以降)印
江戸での販売店を列挙した付刊記(第9章参照)になる。なお、日本古典資料調査データベース(第11章参照)によると、元年初冬(10月)・菱屋孫兵衛単独の刊記を持つ伝本があるとのことなので、さらなる調査が必要。



図56 版面の亀裂(中央に横に走る。矢印で示した) 墨釘(ウラ末尾2行半分)

ために後で彫り加えた、という場合や、版木が痛んできたのでもう一度全体を彫り直すとき、ある個所の文字は読めなくなっていて、しようがなく墨格にした、という場合もあります。つまり、本文中の墨格もその書物の位置づけに関わってくる情報です。

巻末の墨釘は中世の版本にはよく見られるのですが、江戸時代に入るとほとんどありません。唐本では比較的遅くまで見られるので、このあたりは書物に対する美意識の差でしょうか。これも本文中の墨格に準じて重要な情報になる場合があるので記述しておきましょう。

*記述の仕方

- (例1) 四周单边無界10行20字前後、18・6×12・1、
白口双内向黒魚尾「〇〇卷一 一」
かな交じり文、句点・振り仮名あり
- (例2) 左右双边有界11行21字、21・8×15・5、
小黒口双下向花口魚尾「〇〇 一」
漢文、句点・返点・送仮名・豎点あり

などとなります。巻次や丁付は、第1丁オモテの表記通りにおいてよいのですが、特に変則的なことがなければ、「巻幾 幾」(「幾」は一から連続した数字が入ることを示します)あるいは「巻一(〜五) (丁付)」といった記述によって、全体を示してしまっても構いません。

四、写式

*匡郭の有無

正確さや読みやすさを考えて書写するとき、何らかの目印を用いて、行を等間隔に、字をある程度同じ大きさにして写していく必要があります。界線の入った下敷(したじき)を透かして見る(薄い紙の場合)とか、糸を等

と言います。なお、版木の痛みはないが墨の乗り具合(墨付き)が悪く、印刷が鮮明でないものは、むしろ試し刷りや極初期の印刷であると考えられます。

巻末の余白部分をきれいに彫り取らず、残したままにしておく、印刷のときに黒く出してしまうことがあります。また、本文中でも文字を彫り残してその部分が■のままになっていることがあります。これを墨格(ぼっかく)あるいは墨釘と呼びます(一文字や数文字連続のものを墨格、もっと大きなものを墨釘と使い分けてもよいでしょう)。

例えば最初の刊行時、元にした写本の文字がわからず墨格のままだったのが、わかった



図60 マス目刷料紙

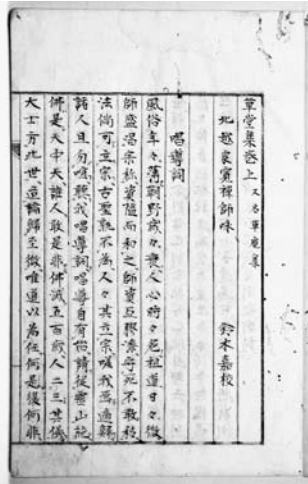


図59 罫線刷料紙



図57 下敷(左は下敷のみ、右に袋綴の袋に入った状態) 行の幅を示す縦界と、字高や題・作者の位置を示す横界がある。

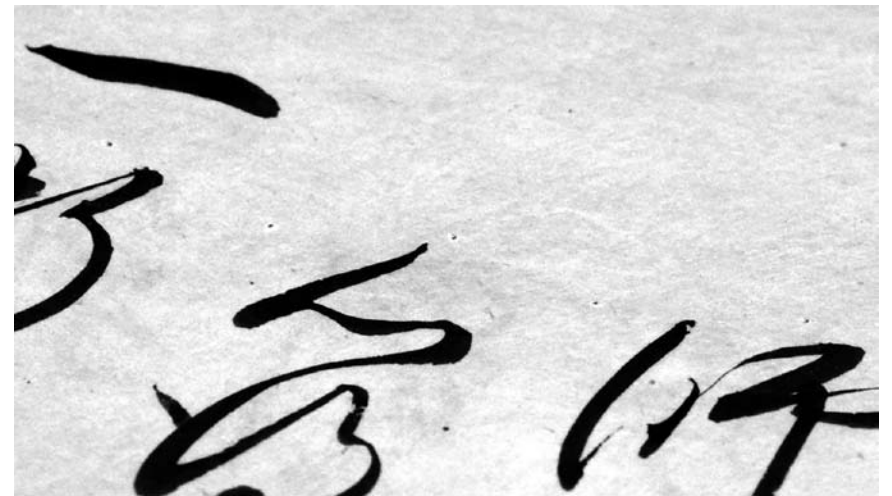


図58 針目安 行頭部分に、行の中央と左右の幅を示す針穴がある。

間隔に張った枠を上から当てて糸の間に書いていくとか、紙の上下に等間隔に針穴を付けて(針目安または針見当)それを目印に書いていく、といった方法があります。

一方、初めから匡郭や界線を手書きで引いたり印刷したりする場合があります。墨であれば墨界、ヘラで凹みを付けた線は白界あるいは押界と呼びます。印刷の場合、江戸初期には古活字版の匡郭と界線を利用した写本が見られ、中期から後期になると明治以降の原稿用紙に当たるものを自ら作ったり市販していたりしたようで、ノート類や原稿類によく使われています。ただし、マス目まで印刷されているものは稀で、多くは縦の界線のみです。匡郭のある場合は版本同様縦横の内法を、無い場合は字高を計ります。

* 本文の形態

版本と同様、行数・字数・用字・訓点などについて記します。

写本特有の問題として、写し手が何人いるかという問



図61 削去上書
「結ぶ」の「ふ」を削去して「ひ」と上書している。

題があります。全体が一人の手によって写されていれば一筆、二人なら両筆、何人か確定できないが複数であることは確実な場合**寄せ書**と呼んでおけばよいでしょう。書写奥書があればよく読んで、実際の状況と照合することが大事です。

なお、著者自筆か転写か、自筆の場合**稿本**か**中書本**(稿本と清書本の間段階)か清書本か、といった問題もありませんが、これはその書物だけでは判断できません。他伝本や同じ著者の確実な筆跡との比較が必要です。

写本は多くの場合、写した後に点検(校正)を行います。筆者自身が行う場合と、周辺人物(監督者のような立場の人間か、むしろ弟子に当たるような人間か)が行う場合があります。訂正の仕方としては、

- 誤字を消さずに直接上書する
- 擦消(唾などを付けてこする)・削去(小刀などで削り取る)・塗抹(白色の絵の具である胡粉を塗る)・墨滅(墨で塗りつぶす)などで誤字を消して、上書または傍書する

○ 墨または朱によるミセケチ(見消)をして傍書するなどさまざまです。このうち、ミセケチとは、誤字が読める状態にしたまま訂正を加えるもので、誤字の脇に「ㄱ」「ㄷ」などの符号を付けたり、上に線を引いたりして、その近辺に正しい字を記すものです。これは**親本**(元にした写本)自体が誤写ではないか、というときにも使われます。つまり、親本に忠実に書写した上で、正しいと思われる字を脇に書くのです。

また、脱字がある場合は、その位置に小さな○などを書き入れて、すぐ脇かその行の上下にその文字を記します。これを**補入**といひ、位置を示す符号を**補入符**と呼びます。

このような行為は多く**識語**(例：二校了(いっこうしおわんぬ))と連動しているのです、両者の対応関係に気を付けましょう(第10章参照)。

なお、写本にあるこのような書き入れは、後人によるものでも多いのですが、なかなか区別が付きにくいので、わからない場合はすべて⑤の項目に記述してよいでしょう。

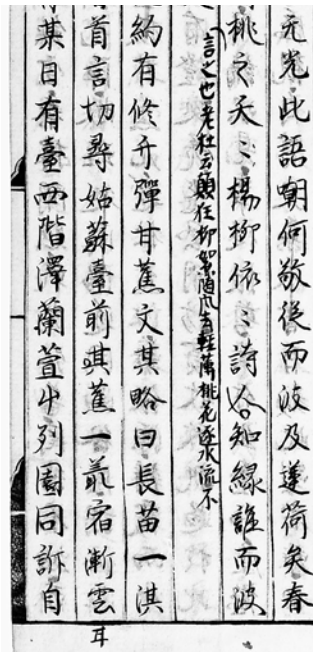


図62 ミセケチ(13行目「其」を「甘」に訂正)・補入(10行目「人」と「知」の間に21字補う)



図63 隠れている丁付

中央糊代部分に「出 三丁」と墨書あり。「出」は書名「出家受戒略作法」の頭文字、「三丁」はこの書物(粘葉装)の場合、丁数ではなく紙数を示している。

なお、列帖装の場合は、折おごとの丁数と折の総数も調べましょう。複数の折を綴り合わせて一冊になっている場合、各折の丁数は一定であることが多いのですが、通常、最初の折の第一丁と最後の折の最終丁は表紙に用いられるため、本文の丁数はそれぞれ他の折より一丁少なくなります。もしそうならない場合は、何らかの改装・切り取りなどが考えられますので、綴じ目の様子や表紙と本文のつながり具合などをよく観察して下さい。

*記述のしかた

無辺無界 8行20字前後、字高○○・○、かな交じり文、句点あり

などと記します。

*写本の丁数

写本の字様に関しては、例えば定家様ていかさま(藤原定家の特徴ある書風を模倣したもの)などとわかれば記します。見慣れるると、文字の巧拙がわかってきますので、よい字であれば能筆のうひつあるいは上写じょうしゃなどと記しておきます。

写本にはほとんど丁付がありません(あるいは綴じ目や糊代のしろに隠れている)ので、二丁一緒にめくらないよう、慎重に数えます。